

海外からの出品数・投票数が過去最多を更新 ——グローバル化が進む板金フェア

塑性加工や新分野の技術を取り入れた新たなものづくりに期待

応募総数は過去3番目の多さ ——コロナ禍から回復し、グローバル化が進む

職業訓練法人アマダスクールは3月9日、AMADA FORUM（神奈川県伊勢原市）で「第36回優秀板金製品技能フェア」（以下、板金フェア）の表彰式を開催した。会場には来賓、受賞した企業・学校、全国各地のシートメタル工業会の会長企業など150名以上が集まった。

板金フェアは国内外の金属加工企業が製作した板金製品や作品を一堂に結集し、加工技術・技能を競う場を提供することで、優れた技術・技能を表彰するとともに一般展示を通して板金加工技術・技能の交流と向上をはかることを目的に、1989年から毎年開催されている。

今回の応募総数は第32回の296点、第33回の288点について過去3番目に多い281点となった。このうち国内からの応募は184点（企業166点、学生18点）で、海外からの応募は過去最多となる97点（企業92点、学生5点）だった。第一段階審査の投票数も1,956票（リアル745票、オンライン1,211票）と過去最多を更新。そのうち海外からの一般投票は646票で、前回（第35回）の約1.25倍に増え、全体の33%を占めた。

若手技能者の目標・励みに

表彰式の主催者挨拶で、職業訓練法人アマダスクール・福井幸弘理事長は次のように語った。

「今回の応募先品数は281点で、このうち海外からは16カ国・97点の応募をいただきました。投票総数は1,956票で、このうち海外からは20カ国・650票ほどとなっています。投票は実物を見て投票する従来のものだけでなく、Web方式を採用したことで、国内外問わず広く参加いただけるようになりました。海外からの投票数も依然として高い数字をキープしており、板金フェアのグローバル化が進んでいることを証明しています」。

「今後、日本の少子高齢化がますます進み、加工設備の自動化や知能化が進むと考えられます。その反面、高度な技術・技能の継承者の育成がますます難しくなっていきます。当フェアが、板金エキスパートを目指す若いみなさまにとってひとつの目標となり、励みとなって、技術・技能の向上の一助になれば幸いです。当フェアが、今後もますます進化・発展し、国内はもとより、世界のシートメタル業界に少しでも貢献できるよう、みなさまのご支援とご協力をお願いします」。



主催者挨拶を述べる職業訓練法人アマダスクール・福井幸弘理事長



来賓挨拶を述べる厚生労働省 人材開発統括官付 能力評価担当参事官室・安達佳弘参事官

日本の技術・技能を世界へ発信

来賓祝辞で厚生労働省 人材開発統括官付 能力評価担当 参事官室・安達佳弘参事官は「能力評価担当参事官室の大きなミッションとして『技能の育成』『技能の振興』があります。政府全体でこの技能尊重気運を醸成するため、昨年11月に、技能五輪の国際大会を2028年に愛知に招致することを表明しました。大会招致などの活動を通じて、日本の技能者の素晴らしさを広め、日本国内における技能の振興、技能人材の育成を進めていきたい」と語った。

続けて、経済産業省 製造産業局 素形材産業室・星野昌志室長は「世界は急速な変化の時流にあります。デジタル化やエネルギー問題への対応が進む中で、あらゆる分野でイノベーションが起こり、伝統技術と革新技術の融合が進んでいます。こうした中、日本経済も節目をむかえています。これをチャンスと捉え、投資と賃金がともに増える成長型の経済を実現していくことが重要です。経済産業省もこうした流れを加速できるよう、人手不足や人材育成、環境問題など各種課題の解決に向けた支援を続けていきたい」と語った。

板金以外の塑性加工技術を組み合わせた 新たなものづくりに期待

審査委員会・割澤伸一委員長（東京大学大学院 新領域創成科学研究科教授）は、次のように総評を述べた。

「今回は造形的・意匠的な特徴を通じて、技術や技能をアピールする作品が多く見られました。作品の形状的な特徴や加工精度だけでなく、製作のプロセスでさまざまな工夫を凝らしているところも印象的でした。どのように製作されたのかを考えながら、作品をご覧いただくのもおもしろいかと思います」。

「『優秀板金製品技能フェア』というからには、『板金加工



「第36回優秀板金製品技能フェア」の表彰式会場

技術』が中心になるのは当然です。しかし、『プレス加工技術』をはじめとした『そのほかの塑性加工技術』を自由に組み合わせ、新たなものづくりを追求し、そのアイデアを業界内で共有することも重要です。また、工業製品にとって重要な、生産性や精度の向上に関する革新的なアイデアにも期待していきたい」。

「最近『トポロジー最適化』の研究領域が活発になっています。これは設計を行う際、コンピュータが設計空間や制約条件、拘束条件などを考慮しながら構造を決めるというもので、人間が考えるのとは異なるデザインができます。ただし、それを実際につくれるかどうかは評価が分かれるところで、製造制約性が課題となっていますが、板金加工技術やレーザ加工技術などを組み合わせることで製造制約に対する解を示せるのではないかと期待しています。前回の総評で、『AIを活用した出展を期待する』とコメントしましたが、こうした新たな分野にも注目していただき、普段の加工や応募作品をつくる際の参考にいただければと思います」。



来賓挨拶を述べる経済産業省 製造産業局 素形材産業室・星野昌志室長



総評を行う審査委員会・割澤伸一委員長（東京大学大学院 新領域創成科学研究科教授）